

makitomo.com 限定 年下恋愛研究室SS 『Emotionless?』

牧山とも

「お茶でも飲んでくか」

書店巡りをして、大学の図書館で論文の参考にする本を数冊借りたあと裕哉は呟いた。

論文提出期限はまだ先だが、そろそろテーマをしぼっておきたい。大学教授で叔父の沢林彰彦に相談したら、よさそうな文献をいくつか紹介されて助かった。

「なんなら、うちの研究室の水嶋くんに訊いても、いいアドバイスがもらえると思うよ」

その際、にっこりとそうつけ加えられたものの、裕哉に実践する気はなかった。

叔父のお気に入りの MIT 帰りの工学博士と、裕哉は正直あまりかかわりたくない。実際に話したことはなく、遠巻きにしか見たこともないが、とにかく取っつきにくそうなのだ。

うっかり話しかけたら、機械オタクの工学博士らしく目で裕哉の全身をスキャンしたあげく「生身に用はないので」とか真顔で冷淡に言いそうな雰囲気というか。

共通の話題なんか逆立ちしてもないなと思いつつ、行きつけの紅茶専門店『ル・クレール』に向かって歩きだす。

すれ違う若い女性の食らいつかんばかりの視線に晒されるのは、裕哉にとっては日常だ。それらの視線を受け流し、本で重たくなったバックパックを背負って颯爽と歩く。ほどなく『ル・クレール』に着いた。ドアを開け、店内にドアベルが響く。

今日はなにを飲もうかと思案しながら、席を探して店内を見渡した矢先、裕哉はふと強い眼差しを感じた。いつもの、ある種、欲望まじりのそれとは違う。なにげなく見遣った先に、意外な人物を発見して双眸を瞞った。

そこには、ついさっきまで考えていた件の水嶋がいたのだ。しかも、彼のほうも自分を見てひどくびっくりしている。その表情が無防備で子供っぽく、思ったより可愛かった。

そんなに驚かなくてもいいだろうに。というか、この紅茶通の人間御用達の店に朴念仁っぽい水嶋がいるほうが驚きだ。

果たしてたまたま入っただけなのか、それともまさか……と裕哉が初めて水嶋に興味を抱く。そして数秒後、意を決して彼のいるテーブルへと近づいていった。